

芥川だより

発行日 * 2024年6月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸
発行人 下村嘉明
〒661-0951
尼崎市田能5-3-10-601
☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****

皮肉にも優しさが罪をつくる



我々の社会には数えきれないほどのルールがあり常識といわれている。あまりにも多様な人間の生きざまに細かなルールを強制することによって衝突を少なくしスムーズな生活にするための方法なのだろう。

民主主義という多数決原理で動く社会は、決して正義を体現した社会ではない。人々の利害関係を一時的に調整した時限ルールである。信仰のルールと社会のルールは違う。信仰は普遍的で永続性を持つが、社会のそれは常に流動的なものである。日々の生活は様々な要因によって日々変化し当てどのない流れの中から逃れることはできないからだ。

80億の人々は、それぞれ置かれている状況も考え方も違う。同じように見える人であっても微妙に違う。元をたどれば皆、同じ兄弟から派生してきてはいるのだが、考えていることは皆違っている。しかし、確かなことがある。人は自分の考え方を中心にして生きている。独裁者がいても、人をロボットのようにコントロールはできない。

不思議にも人には他人にやさしくし喜んでもらうと嬉しいという心根がある。困っている人を見かけると気になり声をかけたくなる。この当たり前のような行為を行なわせる思考は、自分の行為が相手を喜ばすだろうという自分勝手な考えからきている。

私が問題だと考えるのは、人々の思考が、他人への思いやりに左右され、物事の判断基準になり過ぎてはいないかという点だ。テレビやなどで優しさが強調され自分の考えの中にやさしさという特別な聖域を設け自分の考えが及ばぬ世界を作ってしまうと、自分の思考世界が狭まって自由な思考が妨げられる。

例えば、ウクライナ戦争の被災者、身近では身障者などに対する見方が誘導されたかのように一方的になる。その結果、被災者や身障者の個々の想いは無視される。短絡的な優しさは、後で大きな不幸をもたらすことがある。助けようとする人の想いと被災者の想いが全く違うことがあるからだ。

死をめぐるあれやこれ(114) 石川 吾郎

森永卓郎『書いてはいけない』について

経済アナリストの森永卓郎氏の言論に注目が集まっている。最近の著書『書いてはいけない』が三十万部を超える大ヒットになっているが、大手の新聞・メディアに全く無視をされているという。氏は二十数年メディアの仕事に関わってきた、大手メディアが取り上げないタブーが三つあったという。それはジャーニー喜多川氏の性加害問題、財務省が一省庁の域を超えて国民に必要な増税を主導し、それに抵抗する内閣も倒すことのできるほどの権力をもつようになっていくこと。そして一九八五年に起こった日航123号機墜落事件だ。◆ジャーニーズ問題は海外メディアが大々的に取り上げたことから、問題は明らかにされた。財務省について氏は前著「ザイム真理教」で明らかにしている。今回の著書では主に日航機墜落事件の疑惑について語っている。この事件には多くの疑惑があり、この疑惑を解決するためにはヴォイスレコーダーとフライトレコーダーを公開すること、相模湾に落下して場所も特定されている機体の尾翼部分を引き上げることによって解明されるのが分かっているにも関わらず、政府はそれをしようとしなない。大手メディアも追及をしようとせず究極のタブーとなつていく。ヴォイスレコーダーの公開については裁判が進んでいる。またこの問題を解明する企画を提案した

ら番組を降ろされてしまったと森永氏はいう。◆この日航機事件の真相究明がなぜそれほど重要な問題かといえば、これ以後の我が国の対米従属路線がこの事件に密接に関係しているという点が大きいと森永氏はいう。日米構造協議や毎年米国から出される年次改革要望書の内容を我が国はほとんどそのまま受け入れ実現してしまっていること。国鉄・郵政の民営化といった「構造改革」も米国側の要求をそのまま実現した。非正規労働者の拡大で労働の流動化をさせ、その結果国民の多くを貧困化へ追い込むというような流れ、つまり失われた三十年の流れを作り出したのも、この日航機墜落事件が大きく関わっていたのではないかといったことまでこの本では明らかにされている。これは単なる陰謀説とは一線を画して、信憑性は高いと私には感じられる。

◆こういう意味で、実はこの日航機墜落事件の真相を解明することが、今後わが国が失われた三十年から立ち直るかどうか、対米従属路線を抜け出して真の独立国の立場を確立できるかの一つの重要なカギになってくる。◆皆さんには、ぜひ森永卓郎著「書いてはいけない」(三五館シンシヤ)を読まれることをお勧めする。森永氏は、ほぼ大手のテレビ・新聞からは降ろされている状態だが、まだラジオやYouTubeには規制が届いていないので、氏はこれらの場で末期のガンを抱えながら言論活動を続けておられる。◆

なおこの本の内容については、ネットでご本人が語っている動画を観ることもできる。この動画はYouTubeのホームページから「日航機123便墜落の真実なぜ日本は未だに対米従属のままなのか？」のワードで検索していただくこと約五七分の動画が出てくるので、ぜひご覧ください。

芥川だより二〇九号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム114	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 123	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談73	祖蔵哲	3
大峰奥駈道79	下村嘉明	4
ボケ老人の雑話	明石幸次郎	5
オクラの山たより93	因了生	6
隠された歴史68	満田正賢	8
俳句	影山武司	11
編集後記	SK生	11
ふみの道草72	山椒魚	12

素老人☆よもだ帳 (123)

坂本一光

◆贈る言葉―父から子へ

NHKの教養番組に『100分で名著』がある。読んだことがあり今も関心がある本や、まだ読んでいないが興味が持続している本が取り上げられると観ることがある。現在のテーマは、昭和三十五年(一九六〇年)に刊行された宮本常一の『忘れられた日本人』である。

第一回の放送の初めに常一の生い立ちの紹介があった。山口県に生まれたのが明治四十年(一九〇七年)とあり、父と同居であった。続いて、「十五歳で大阪に出て、大正十三年(一九二四年)、郵便局長になる」とあり、意外な経歴であった。番組では、大阪に出る時に常一の父が贈った十カ条の言葉(要旨)の紹介があった(『民俗学の旅』より)。こんな親子がいたのかと驚いた。以下の十カ条である。本の内容より、父親のこれらの言葉に参ってしまっただ。こんな人がいたのだ。

- (1) 汽車へ乗ったら窓から外をよく見よ。
- (2) 村でも町でも新しくたずねていったところではかならず高いところへ上ってみよ。
- (3) 金があったら、その土地の名物や

料理はたべておくのがよい。

- (4) 時間のゆとりがあったら、できるだけ歩いてみるこただ。
- (5) 金というものはもうけるのはそんなにむずかしくない。
- (6) 三十歳まではおまえを勘当したつもりでいる。しかし三十すぎたら親のあることを思い出せ。
- (7) ただし病気になるったり自分で解決のつかないようなことがあったら、郷里へ戻ってこい。
- (8) これからさきは子が親に孝行する時代ではない。親が子に孝行する時代だ。
- (9) 自分でよいと思ったことはやってみよ。
- (10) 人の見のこしたものを見るようにせよ。

以上の十カ条である。この中の何か一つでも、私は子どもに言ってやっただろうか。
(かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人)

「哲学爺い」の時事放談(73)

祖蔵 哲

「だから」の哲学

早いもので今年も半分が過ぎた。相変わらずニュースには事欠かない。パレスチナやウクライナでの戦争状態は益々エスカレートしている。そんな中、先月20日イランのライシ大統領、外相が搭乗

していたヘリが墜落し死亡が確認されたのは衝撃であった。影の力が暗躍する近年の国際情勢では何が起こりても不思議はないのだが、あまりにも不可解である。今のところ大きな反撃は見られないが、

同時多発テロやその報復の連鎖が過去にも多くあったので心配である。このような不安定な国際情勢の中、国際刑事裁判所の主任検察官は同日、パレスチナ自治区ガザ地区での戦闘をめぐる戦争犯罪容疑で、イスラエルのネタニヤフ首相らとイスラム組織ハマスの複数指導者らの逮捕状を請求したと発表した。現実的実行力は乏しいものの人道的犯罪であるという意味で両者を同じ位置に置くというのは正しいかもしれない。いずれにせよ、まずは停戦である。

さて、国内では相変わらず自民党の裏金づくり問題に絡む国会審議が野党との駆け引きで混乱している。政権与党は最近の国政、地方レベル選挙で連続して敗

北しているため存続の危機感を持っている。ここで本来、野党が団結して政権打倒に向かわなければならないのだがそうはならないのが現状だ。一部の保守的野党は与党政権参加を目論んで打算的行動を行っている。国民も大きな変化を望んでいない。しかし、政治はひそかに大きく変化している。日本の政治危機はこれからである。

(1) 差別発言

さて、最近のニュースで気になったことが国内外で起きている。それは「差別」に関する発言問題だ。日本の上川外相は18日、静岡県知事選応援演説で自民党推薦の女性候補の当選を念頭に「この方を私たち女性が(知事として)「うます」して、何が女性でしょうか」と述べた。女性候補を新しい知事として「生み出す」という意味で述べたとみられるが、「うます」として、何が女性でしょうか」という発言は、女性の出産を想定させるとして大きな問題になり、外相は後に発言を取り消し陳謝した。この上川氏自身も女性初の総理候補として期待されている人である。

国外では20日、フランシスコ・ローマ教皇が非公開の会合で、聖職者を養成する神学校に同性愛の男性の入学が認められるべきかについて参加者から質問を受けた。その際に、同性愛の男性を中傷す

るイタリア語の言葉を使って、入学を認めるべきではないとの趣旨の発言をしたという。後に、教皇は自身がアルゼンチン出身であり「イタリア語でどれほど侮辱的な言葉であるか認識していなかった」と釈明した。バチカンも現在も原則として同性愛の男性を聖職者に任命することはできないとの立場を表明している。ただ、フランシスコ教皇は就任後、ローマ・カトリック教会でタブー視されてきた同性愛にも柔軟な姿勢を示してきたのであるが。

(2) 自覚のない差別

差別発言をする側に差別意識がないものを「マイクロ・アグレッション(小さな攻撃)」と言う。この言葉は、マイノリティに対する侮辱や差別的な言動を指す言葉として1970年代のアメリカの精神医学者であるJ・ピアース氏によって提唱された。対比語は「カバード・アクション」であり意図的に差別を包含するやり方だ。私も知らずに使うが、日本で暮らす外国人のように見える人に対して、「日本語がお上手ですね」と言うのは、一見褒め言葉のように見える。しかしその裏には、「外国人(のように見える人)が、こんなに上手に日本語を話せるわけがない」という差別意識が隠れているのだ。これらの根底には無意識の偏見がある。先の上川発言は「慈悲的差別の偏見」

例だ。これは、女性や少数派に対する好意的な思い込みが逆に差別に繋がることである。男性ではダメ、女性「だから」こそ改革できるという逆偏見である。そしてローマ教皇の発言は異国言語、文化に対する無関心である。無自覚に自国の基準を他国に適用している偏見である。

(3) 差別とは何か、区別と差別

「区別」とは分類する、識別することであり、知ることでもあり人間の知識活動の基本である。それに対して「差別」は、この知れたものを主観で善悪を評価することである。「区別」が客観的理解であるのに対して、この主観は、感情に基づくものが多く自己中心的である。米国のジャーナリストのリップマンは『人間は見えてから定義するのではなく、定義してから見るのだ』と言っている。

「区別の目的」が当人に不利益をもたらすものであり、「区別の方法」が社会的、歴史的な偏見に基づく「特徴(だから)」である場合、それは「意図的悪質な差別」となる。先ほどの「自覚のない差別」は「区別の目的」に不利益という意識はないが、「区別の方法」が偏見に基づいている場合である。

「差別がなぜ悪いのか」については差別される人が不当に害や不利をもたらせるといふものと、それが「社会的意味」を持つからであると考えられている。学

校で、力仕事はもっぱら男子生徒に依頼し、食事の後片付けは女子生徒に依頼するという事例は、男性は力持ち、女性は家事仕事という「規範」を「社会的意味」として押し付けるものであり社会的偏見を作り出す機能をもつ。このような根拠のない規範が、先ほどの「自覚のない差別」を作り出しているのだ。

(4) 逆差別

今月5月にNHKで放映された4回シリーズドラマ「%パーセント」の公開講演会があったので聴きに行った。講師は番組監督であった。これも偏見であるが、この監督は男性でなく女性、しかも30前後の若い人。最初から偏見に遭遇した。ドラマの内容は、当事者である障害者自身がドラマの主人公になり制作側の健常者の偏見と闘うという劇中劇。講演を通して感動したのは、この脚本が、この監督自らが企画して実現したこと。監督本人の体験を通じて、素直に偏見と差別を描いている。例えば、監督の立場として障害者の劇団に出演交渉に出かけた際に、障害者内部でも出演そのものに賛否の議論があったことなど。肯定的な意見は「我々の現状を知ってもらえるいい機会だからドラマに積極的に出よう」というもの。それに対しては「我々は見世物ではない、哀れみなんかいらぬ」という否定派。

「パーセント」というタイトルが示しているのは「比率」「割合」、つまりマイノリティーに一定の割合で機会を与えようという「アファーマティブ・アクション(積極的な差別)」のことだ。日本でも最近では理科系の大学入学定員に女性枠を設けることを始めている。これは歴史的に女が理系に向かないという偏見があったためだ。これを強制的に解除、回復するための特例措置である。この制度は黒人差別がひどかったアメリカでの人権回復運動からきているが、一方ではこの急激な変化に問題も出てきている。女性に一定の合格枠を保証するということは、男性の定員枠が減るということである。同じ学力なのに男性というだけでなぜ勉強の機会が奪われるのか、これが多様性の押し付けであり逆差別であると主張する動きもある。歴史的負債をなぜ今、この私が負わなければならないのかという本音もある。確かにこの制度だけが問題を解決するわけではない。より包括的に考えるべきであろう。

(5) 差別はなぜなくなるのか

「みな違っていいよ」という多様性を認めるという「相対主義」が皮肉なことに「差別」を生むことにもなる。「絶対的真理はない」ということは、つまり、「差別をする」ということも多様性の一

つであり、これを否定できないからだ。ギリシャのソフィスト、プロタゴラスは「人間は万物の尺度である」と言っている。

「人間は考える葦である」とは、パスカルの言葉である。葦というのは水辺に育つ、弱く細い草のような植物のことで、パスカルは著書の中で「人間は自然の中では葦のように弱い存在である。しかし、人間は頭を使って考えることができる。」と書いている。この時、弱い人間は何を

人間の消滅を予見している。このままでは男だから、日本人だから、資本主義だから生き残れるという可能性はゼロである。

大峯奥駈道(79)

体験型人間学 29

下村 嘉明

小さな公共事業は、期末の3月末頃を工事期間の終わりにしているのがあるから、意外と仕事があるが、春先には予算の都合で仕事が少ない。私は、日雇い警備員なので、もっぱら小さな土木工事やマンションの修繕工事に行くのだが、土木工事は、ほとんどが市や県の公共事業である。2トンダンプにコンボを積んで走っているのは、多くが公共事業関係だと思う。最近よく行く西宮市の公共事業は、大きなものは少なく割と小さなものが多い。大きな事業は、私の会社では参加できないからかもしれないが、こまごまとした工事が多い。しかし、こまごまとした仕事を長年続けている建設会社は意外と多い。少ない仕事を多くの会社で取り合

いをしてる感じだ。

そんな会社は、小さな零細企業が多いから、現場監督は働かなくてはいけない。現場の作業員と同じように土木作業もするし、写真撮りもこまめにしなければならぬ。市の担当者やコンサル、ガス関係者など毎日のように来る関係者にも説明をしなければいけない。誰よりも監督が大変そうに見える。

水道や排水官などの関係は、ほとんどが道路の地下に埋めてあるので、工事の手順は工事ができる一日の範囲を決めてアスファルトをカッターで切り、ユンボで掘ってダンブに土とアスファルトを分けて積み込み、作業が終われば、また埋めなおすのだが、アスファルトの下に敷く碎石は新しいものを敷き、その上に新しいアスファルトを敷く。

碎石もアスファルトも再利用されたものが大半であるようだ。ある設備工事では、道路から取り出したアスファルトを小さなミキサーに入れガスボンベで熱して道路に敷く工事を見たが、出来上がりはきれいだった。今や、簡単にものを捨てられる時代ではなくなったのだ。

それにしても、日雇いのつらさは、仕事がないことが一番だ。作業員の中でこまめに働く人はたいがい日雇い労働者だ。毎日、仕事が終われば一万円手渡しの仕事員が必ず何人かはいる。彼らも仕事がないければ、金はもらえない。厳しい現実だ。

ボケ老人の雑記(その2)

明石 幸次郎

元いた会社の先輩の技術屋さん2人と、私で退職してから定期的に飲んで雑談をやっていました。コロナ感染禍で年間程会うのを中断していましたので、久しぶりに再会しようとして先輩のAさんに連絡しました。それは是非直ぐにやろうと言うことでもう一人のHさんに自分から連絡しておくと言うことになりました。

翌日、AさんがHさんの携帯に何度も電話したがつながらず、音声でこの電話は現在使われていませんということなので、自宅の電話番号は知らないで連絡の取りようがないと言われた。それでは、私の方で調べてHさんに連絡してみますと答えた。年賀状を調べたら住所印が押されていて固定電話番号があったが、賀状の文面が本人の文字ではなく、奥さんが毛筆で「生きているだけで意味がある」五木寛之の言葉と達筆に書かれていた。これはどういう意味でこの言葉を書かれたのか? と気になっていた。正月にこの年賀状を見た時は例年であれば、Hさん本人が印刷したありふれた文面で、今年もお会いしましょうという文字だけが直筆で隅に添えられているだけに、今年は何故か奥さんのが書かれたのか? と思ったがその時は、それ以上は深くは考えなかった。

早速にHさんの自宅に電話したら奥さんが出られたので要件を話したらすぐに「折角電話を頂き、お誘い頂いたが、主人は痴呆が進み徘徊するようになり私と娘だけでは手に負えなくなり去年の8月に介護施設に入れました。もうお知り合いの方などのお顔やお名前などは分からなくなってしまうと思います。面会に来ていただいても本人はお話も出来ないと思います」と言われたので「そうですか? それは、驚きました。奥さんも大変だと思いますが、今、お話を伺って今年頂きました年賀状の文面に書かれた意味が分かりました。それでは、失礼します」とショックを受けて電話を終えた。

暫くしてから、なぜもつと奥さんへの介護で大変な気持ちに添った、お見舞いの言葉が咄嗟に出てこなかったのか? と反省したが、ボランティア活動の電話相談と違い、Hさんの奥さんが何も辛い、しんどい、苦しいなどの言葉を発せられなく、状況を冷静に淡々としゃべられるのに、こちらからは、余計な言葉などは要らないとも思った。想像するにこの4年のコロナ禍の間に痴呆症状が進み、去年8月(Hさん77歳)に介護施設に入られたと言うことは、それまで家族の方が色々大変なお世話をされてこられて、その結果で「生きているだけで意味がある」という心境に奥さんがなられたのであろうと腑に落ちた思いになった。

翌日、Aさんに連絡して、Hさんの状

況を伝えたら、「それは、ショックやな4年前に会った時は特に何もなくて、ごく普通に振る舞っていたけどなあ。ところで、私も、去年まで1年間断酒会に入っただけで、アルコールを断っていたんや。今もアルコールは口にしていない。まあ、アル中になっちゃったんや。畑仕事は趣味でやっていたんやが、コロナが流行り出してから外出自粛や何かで人と会わなくなり、家に居ても女房だけと話をするだけではなあ。そのうち昼から酒を飲みだして夜もずつと飲んでいたので、去年、医者に無理やり連れていかれたらアルコール依存症と診断され、それで断酒会に入ったという訳や。今度、会っても酒は飲まないのですね。それでは、近々に2人だけ飲談しよう!」と約束して電話を終えた。

私は、このコロナ禍の4年会わない中で、中高年の知り合いの二人の身体の不調になったことにショックを受けていたが、この先輩二人に共通することは、真面目で、几帳面。人と積極的に交わらない。技術屋によくある、人といっても自分から話しかけない、所謂、寡黙な研究者タイプである。こういうタイプの中高年は孤独になりがちである。コロナ禍で身体、心に変動が起こり易かったのかと想像した。これは、社会学者、精神科の学者の研究課題ではないかと思えます。

それで、私なりに、こんな状況でもどう上手く自分の身体と心とこの歳で付き合

うかは、コロナ禍愚考で書きましたが、人と上手く付き合ひ、歓談し、大いに喋れる相手を持つてゐること。身体を動かし汗をかいて新陳代謝を活発にすること。自分のためだけに生きずに社会的な関わりを保ち、他者に対しても関心を持ち、良き隣人たらんと行動すること。自分自身をいかにして機嫌よく日々を送れるか。その結果、今日は幸せであつた、どうか明日も幸せであるように生きられるか？を寝る前に想えて安眠できるかである。この駄文を書きながら改めて愚考した次第であります。

それを拾い上げていくことにします。

さて「磊落(らいらく)」という言葉があります。「磊落」とは「おおまかで小さなことにはこだわらないこと、またはそのさま」という語意です。この「磊落」の語が晩年の蕪村の句のキーワードであるといったのは俳人の金子兜太です。たとえば次に示す蕪村の句です。この句が作られたのは天明三年。蕪村が六十八歳で亡くなつた年です。

① 紅梅の落花燃もゆらむ馬の糞

一七八三(天明三年)一月二十一日

紅梅の落花が燃えているかのように見える、馬糞の上で、という句意です。「春の海ひねもすのたりのたりかな」や「菜の花や月は東に日は西に」の名句に親しんだ蕪村愛好者には「あつ」と驚くような句です。見たまをきつと俳句に仕上げてしまう一茶ならともかく絵師でもある蕪村の句ですから。しかも一茶には「山霧や声うつくしき馬糞かき」という句があります。この句に比べると蕪村の句の方がかなり生々しく感じられます。一幅の絵のような句を詠むとされる蕪村ですが、「紅梅の」の句は美しい絵とするにはかなり難しいでしょう。

おもしろいことに「紅梅の」の句にある「糞」を尾形仿は「くそ」と読んでいますが、金子兜太は「ふん」と軽やかに

読みたいたいっています。尾形氏は「糞」を「まだ湯気の立つ馬糞」ととらえていたようですが、一方の金子兜太は「乾きもせず、湯気が立つほどでもない、ほどほどの生氣」のある「糞」であるとしません。

二

がないのも、そのためと見る。「馬糞」の読み方についてのすぐれたまとめでありました。

もつとも、この「糞」という語をどう読むかについては正岡子規を中心にして行われた「蕪村句集講義」の輪読の場でも問題になつたらしいのです。子規は「(糞は)ヒリタテの暖かいのにて煙でも出ている」といつて、そこにいた参加者たちの失笑をかつたそうです。たぶん子規は尾形氏と同じく「糞」を「くそ」と読んだのでしょうか。これに対しておそらくは「糞」を「ふん」と読んだ高浜虚子は「乾きてカスカスした」と言つていたそうです。

この「紅梅の」の句にはかなりはつきりと出ていますが、晩年の蕪村の句作ぶりには大きな変化が見られます。たとえば死の年の十三、四年ほど前となる明和年間にあつて蕪村は次のような句を詠んでいました。

② 牡丹散りて打ちかさなりぬ二三片

一七六九(明和六年)

③ 不二ひとつづみのこして

若葉かな

④ 腰抜けの妻つくしき

火燧(こたつ)かな

一七六九(明和六年)

オクラの山たより(93)

困了生

一

先回まで与謝蕪村、小林一茶についてあれこれと書いてきました。この二人の俳人について筆の進むのにまかせて書き進めてきました。そのため見落としたこと、あとから気づいたことなどがいくつ

かありましたが、特に蕪村についてはそうしたものはいくつかあります。今回は

要するに物の質感をどうとらえるかの問題ですが、金子兜太はこの問題について次のように述べています。

(「糞」を)湯気が立つほどと受け取るのは「燃らむ」に即しすぎていて物を生かしていない。だいいち、紅梅が馬糞の上に落ちた、と受け取るのも事実本位にすぎない。上でも周辺でもよい。要するに、紅梅の花びらと馬糞との配合の妙味、そこに醸される天然の物どうしの照応の得(え)もいえぬ生々しさ美しさが焦点なのである。この句に一抹の不潔感

⑤ 水仙に狐遊ぶや宵月夜

一七五(安永四)年

⑥ 春雨や蛙の腹はまだぬれず

一七八二(天明二年)

⑦ 雪に来よといふ人まだ住むや

よしの山

一七八二(天明二年)

とまでいつています。しかも難しく分かりにくい句は「闇夜に錦(にしき)着たらん類(たぐい)」で「無益」だといっています。とはいっても其角に注目している蕪村は「五元集」は魅力ある句集だとして次のように述べています。

これらの句には明和期にあった艶やかな美しさというものはかなり後退していません。「水仙」「狐」「宵月夜」の三つを重ねる意外性、「春雨」に「蛙の腹」を付ける突飛さ、「吉野山」とくれば「花

其角が句集は、聞こえがたき句(難解でむずかしい句)多けれども、読むたびに飽かず覚ゆ。これ、角がまさされるどころ也。とかく句は磊落なるをよしとすべし。

一七七七(安永六年)「新花摘」より

この句は西行の和歌「さびしさにたへたる人のまたもあれな庵ならべん冬の山里」を踏まえてはいますが、古典主義の俳人といわれた蕪村が古典の一般的常識から少々はずれています。どうしたことでしょうか。

この変化を理解するカギは先ほどの「磊落」という言葉です。

芭蕉の弟子であった其角。その其角の孫弟子にあたる蕪村は其角の句集「五元集」を批判しておおかたは難解な句で好句が少ないと述べ、さらには

「其角は俳中の李青蓮(唐の詩人李白のこと)と呼ばれたるものなり。それだに百千の句のうち、めでたしと聞こゆるは二十句にたらず覚ゆ」(「新花摘」より)

作」に作られたものに佳句は多くあると子規は気づいたのだと、金子兜太はいつています。

もちろん「無雑作」に作られた句といふのは「磊落」な気分で作られた句といふことでしょう。子規は蕪村の「新花摘」から「磊落」＝「無雑作」による句作を知ることによって画論の「写生」を借用していた時期から子規の文学論の中核といつてよい「写生(生を写す)」へと力強く進んでいったのだといふのは金子兜太の説です。

前に示した⑤から⑦の句と①の「紅梅」の句とを共通するのは「磊落」ということでしょう。⑤から⑦の句には「磊落」によつてとりあげられた軽やかな意外性から思いがけない諧謔味・滑稽味を生まれています。もちろん「紅梅」の句でも、ほのかにかおる滑稽味とともに、花びらと馬糞が、生々しい姿でそこに活写されています。なにといいこのない風景をびしゃりと一句におさめ、実風景や人間のありようをみごとにとらえた写生句、しかも人間性までもわずかにただよう句を作らせたならピカイチであった一茶につながっていく部分がここにはあるように筆者には思えます。

句があります。

⑧ 几巾きのうの空の有りとろ

一七六九(明和六年)

「几巾」は「いかのぼり」と読みます。「風」のことで「いかのぼり」と呼ぶのは江戸時代の上方面の呼び方です。同時代の江戸では「タコ」、長崎では「ハタ」と言っていました。風揚げが日本のあちこちで見られるようになったのは蕪村が生きた時代より百年くらい前からのことでした。そもそも風揚げは長崎にやってきましたオランダ船によつて十七世紀はじめにもたらされたものなのです。長崎の出島で盛んに揚げられ、それを見た長崎の人々が真似を did したのが日本の風揚げの始まりで、それが瀬戸内海航路を通じて大坂へ、京都へ、そして江戸へと、あつというまに伝わりました。蕪村の少年時代にはすでに日本の正月の風景としてすっかり人々の目になじんだものとなつていたことでしょう。

この⑧の句について詩人の萩原朔太郎が優れた解釈をしています。

北風の吹く冬の空に、風が一つ揚がつている。その同じ冬の空に、昨日もまた風が揚がつていた。蕭条(しょうじょう)というものは寂しく風が吹くさま)とした冬の季節。凍った鈍い日ざしの中を、悲しく叫んで吹きまく風。硝子

(ガラス)のように冷たい青空。その青空の上に浮かんで、昨日も今日も、さびしい一つの凧が揚がっている。飄々として唸(うなり)りながら、無限に高く、穹窿(きゅうりゅう)に半球形(はんきゅうけい)のこと。または「天」の上で悲しみながら、いつも一つの遠い追憶が漂っている！

詩人の感性がとらえた優れた解釈ですが、朔太郎はこの言葉に続けてこう書いています。

この句の持つ詩情の中には、蕪村の最も蕪村らしい郷愁とロマネスクが現われている。「きのふの空の有りどころ」と言う言葉の深い情感に、すべての詩的内容が含まれていることに注意せよ。「きのふの空」はすでに「けふの空」ではない。しかもちがった空に、いつも一つの同じ凧が揚がっている。即ち言えば、常に変化する空間、経過する時間の中で、ただ一つの凧(追憶へのイメージ)だけが、不断に悲しく寂しげに、穹窿の上に実在しているのである。……中略……「きのふの空の有りどころ」という如き語法が、全く近代西洋の詩と共通するシンボリズムの技巧であって、過去の日本文学に例のない異色のものであることに注意せよ！蕪村の不思議は、

外国と交通のない江戸時代に生まれて、今日の詩人と同じような欧風叙情詩の手法を持っていたということである。

言われていることは是非はともかく傾聴に値する意見でしょう。朔太郎の詩的の通り⑧の句を見れば蕪村の感性は近代詩の世界に限りなく接近しています。

⑧の句中にある「きのふの空」、それはすでに存在しない空ですが、その空に揚がっている凧は、イメージだけの凧です。もちろん、風の音も聞こえない。高い空に揚がっている凧のイメージです。

このイメージと同じ状況設定で書かれた近代詩があります。「汚れつちまつた悲しみに」の詩人中原中也の「曇天」です。ここでは「凧」ではなく「黒い旗」が空に揚がっていました。中也の「曇天」を次に示しますが、編集の都合で文字サイズを小さくします。

ある朝僕は空の中に、
黒い旗がはためくのを見た。

はたはた それははためいてゐたが
音は聞こえぬ 高きがゆゑに。

手繰(たぐり)り下ろそうと僕はしたが、
綱もなければそれも叶(かな)わず、

旗は はたはた はためく ばかり、
空の奥処(おくが)に舞ひ入る如く、

かかる朝(あした)を少年の日も、
屢々(しばしば)見たりと僕は憶(おも)ふ。
かの時はそを野原の上に、
今はた都会の甍(いらか)の上に。

かの時この時は隔つれ、
此処(こゝ)と彼処(かしこ)と所は異なれ
はたはた はたはた み空にひとり、
いまま渝(かわ)らぬかの黒旗よ。

日々の生活をこよなく愛し、人生への懐かしい思慕を持つている楽道家でもあつたとされる蕪村が見つめる「きのふの空」とさまざま不幸と挫折を繰り返してきた詩人中也の「きのふの空」とが本質的にどう違うのか検討する余裕はもはやありません。しかし、萩原朔太郎の言うように蕪村のポエジーは近代の詩人中原中也に近いものであるとはいえそうです。

隠された歴史(68)

満田 正賢

今回からは、中国の史書である隋書に記載された倭(たい)王阿每多利思北弧の中国への遣使記事、そしてそれに続く

文林郎裴清の倭国への派遣記事と、日本書紀・推古紀に記載された小野妹子派遣記事、鴻臚寺掌客裴世清の来朝記事とが一致するかどうかという問題を深めていきたいと思ひます。

まず、隋書倭国伝の本文(読み下し文)を抜粋してご紹介いたします。

*倭と倭を同じとみて隋書倭国伝として記述している紹介記事もありますが、

隋書の「帝記」には「倭国」という表記がされているにも関わらず、隋書・列伝・東夷の巻に載った記事は明確に「倭国」と表記されています。

「開皇二十年、倭王、姓阿每、字多利思北孤、号阿鞬羅彌は使を遣はし闕に詣る。上は所司をしてその風俗を訪はしむ。使者は言ふ。倭王は天を以つて兄と為し、日を以つて弟と為す。天が未だ明けざる時に以つて政を聴き、蹴踏して坐す。日出ずれば、すなわち理務を停め、我が弟に委ねむと云ふ。高祖曰はく、これ大いに義理無し。ここに於いて、訓じてこれを改めしむ。」

「王の妻は雞彌と号す。後宮は女、六、七百人有り。太子を名づけて利歌彌多弗利と為す。城郭無し。内官は十二等あり。一は大徳と曰ふ。次は小徳、次は大仁、次は小仁、次は大義、次は小義、次は大禮、次は小禮、次は大智、次は小智、次は大信、次は小信。員は定数無し。軍尼

一百二十人有り。なお中国の牧宰のごとし。八十戸に一伊尼翼を置く。今の里長の如くなり。十伊尼翼は一軍尼に属す。」

「大業三年、その王、多利思北孤は使を遣はし朝貢す。使者曰はく。海西の菩薩天子、重ねて仏法を興すと聞く。故に、遣はして朝拜し、兼ねて沙門數十人來たりて仏法を学ばむとす。その国書曰く。日出ずる所の天子、書を日没する所の天子に致す。恙なきや、云々。帝は之を覽じて悦ばず。鴻臚卿に謂ひて曰はく、蛮夷の書、無礼有るは復以つて聞する勿かれ。」

「明年、上は文林郎の裴清を使して倭国へ遣はす。百濟へ度り、行きて竹島に至る。南に耽羅國を望み、迥（はる）かな大海中に在る都斯麻國を経る。また東し、一支國に至る。また竹斯國に至る。また東し、秦王國に至る。その人は華夏と同じ。思へらくは夷洲。疑いは明らかにすること能はず。また十余國を経て海岸に達する。竹斯國より以東はみな倭に附庸す。」

「倭王は小徳、阿輩臺を遣はす。数百人を従え、儀仗を設け、鼓角を鳴らし、來たりて迎ふ。後十日、また大札、哥多毗を遣はす。二百余騎を従え郊に勞す。既に彼の都に至る。」

「その王は清と相見て、大いに喜びて曰はく。我は海西に大隋禮儀の國有りと聞き、故に遣はして朝貢す。我は夷人にして、海の隅に僻よりて在り、礼義を聞か

ず。ここを以つて境内に稽留し、即ち相見ず。今、故に、道を清め、館を飾り、以つて大使を待つ。乞ひ願わくは、大國の維新の化を聞かむ。清は答へて曰はく。皇帝の徳は二儀に並び、沢は四海に流る。王が化を慕うを以つて、故に行人を遣はし、來たりて此に言論す。既にして引き、清は館に就く。」

「その後、清は人を遣りて、その王に謂ひて曰はく。朝命は既に達す。即ち戒塗を請ふ。ここに於いて、宴を設けて享し、以つて清を遣はす。また使者を清に隨せしめ、來たりて方物を貢ぐ。この後、遂に絶ゆ。」

次に日本書紀・推古紀の原文を抜粋してご紹介します。

「十五年秋七月戊申庚戌、大禮小野臣妹子遣於大唐、以鞍作福利爲通事。」

「十六年夏四月、小野臣妹子至自大唐。唐國號妹子臣曰蘇因高。即大唐使人裴世清・下客十二人、從妹子臣至於筑紫。遣

難波吉士雄成、召大唐客裴世清等。爲唐客更造新館於難波高麗館之上。六月壬寅朔丙辰、客等泊于難波津、是日以飾船卅艘迎客等于江口、安置新館。於是、以中臣宮地連烏磨呂・大河内直糠手・船史王平、爲掌客。」

「秋八月辛丑朔癸卯、唐客入京。是日、遣飾騎七十五匹而迎唐客於海石榴市術。額田部連比羅夫、以告禮辭焉。壬子、召

唐客於朝廷令奏使旨。時、阿倍鳥臣・物部依網連抱二人、爲客之導者也。於是、大唐之國信物、置於庭中。時、使主裴世清、親持書兩度再拜、言上使旨而立之。其書曰「皇帝問倭皇。使人長吏大禮蘇因高等至具懷。朕、欽承寶命、臨仰區宇、思弘德化、覃被含靈、愛育之情、無隔遐邇。知皇介居海表、撫寧庶民、境内安樂、風俗融和、深氣至誠、遠脩朝貢。丹款之美、朕有嘉焉。稍暄、比如常也。故、遣鴻臚寺掌客裴世清等、稍宣往意、并送物如別。」時、阿倍臣、出進以受其書而進行。大伴嚙連、迎出承書、置於大門前机上而奏之。事畢而退焉。是時、皇子諸王諸臣、悉以金髻花着頭、亦衣服皆用錦紫繡織及五色綾羅。一云、服色皆用冠色。丙辰、饗唐客等於朝。」

「九月辛未朔乙亥、饗客等於難波大郡。辛巳、唐客裴世清罷歸。則復以小野妹子臣爲大使、吉士雄成爲小使、福利爲通事、副于唐客而遣之。爰天皇聘唐帝、其辭曰「東天皇敬白西皇帝。使人鴻臚寺掌客裴世清等至、久憶方解。季秋薄冷、尊何如、想清恣。此即如常。今遣大禮蘇因高・大禮乎那利等往。謹白不具。」是時、遣於唐國學生倭漢直福因・奈羅譯語惠明・高向漢人玄理・新漢人大圀・學問僧新漢人日文・南洲漢人請安・志賀漢人慧隱・新漢人廣濟等并八人也。是歲、新羅人多化來。」

「十七年秋九月、小野臣妹子等至自大唐。唯通事福利不來。」

通説では倭王阿每多利思北孤は推古天皇または聖德太子であると見做していますが、しかし、隋書に記された開皇二〇年（六〇〇年）の倭王阿每多利思北孤の遣使記事が推古紀にはありません。最初に記された小野妹子遣使記事の年・推古十五年は六〇七年であり、隋書の大業三年記事に相当します。そして、隋書を読むと阿每多利思北孤は明らかに男性です。仮にそれが聖德太子であるとしても、「後宮に女六、七百人有り」と紹介された阿每多利思北孤のイメージは聖德太子のイメージとは異なります。

古田史学の中で論じられている仮説については、谷本茂氏が古田史学論集『古代に真実を求めて』第二十五集に『鴻臚寺掌客・裴世清Ⅱ隋・煬帝の遣使』説の妥当性について「『日本書紀』に於ける所謂『推古朝の遣隋使』の史料批判」という論文を発表しています。

谷本氏が古田武彦氏の論考をふまえて主張した内容は次のようなものです

①推古紀には「大唐使人・鴻臚寺掌客裴世清」と書いてあり、隋書にある「文林郎・裴清」とは異なる。

②隋書に記された開皇二十年（六〇〇年）の倭王阿每多利思北孤の遣使記事が推古紀にはない。

③推古紀、舒明紀には「十年〜十二年の庚午年のずれ」が生じている部分がかつか認められる。

④推古天皇・聖德太子が遣使を派遣した

相手は唐朝であって、隋朝ではなかった。隋書倭国伝の多利思北弧（倭国）は、推古天皇・聖徳太子とは全く別個の王朝の王者であった。

私は、倭王阿每多利思北弧が推古天皇または聖徳太子であるとする通説には反対ですが、同時に古田武彦氏の仮説にも反対しています。古田氏の考察は「文林郎裴清」が隋代に来朝したのは倭国を代表する九州王朝であり隋書に記載されているが、鴻臚寺掌客裴世清の来朝は中国史書に記載されておらず、それは倭国を代表しない近畿の一豪族への訪問だったからである、というものです。

一方、古田氏は『古代は輝いていたⅢ』（朝日新聞社）において、「元興寺縁起・丈六光銘には、裴世清一行の副使の称号と人名『副尚書祠部主事遍光高』が記載されている。これは、倭国伝にも推古紀にもない資料だ。何等かの原資料にもとづくものであろう。」と考察しています。私は古田氏の考察通り、「丈六光銘」は鴻臚寺掌客裴世清が来朝した証拠であると考えます。古田氏は『古代は輝いていたⅢ』においては法興寺（飛鳥寺）の丈六仏が九州から移設されたものという推測をしています。この推測では、鴻臚寺掌客裴世清が近畿に来たという古田氏自身の見解と矛盾します。一方で古田氏は『古代は輝いていたⅢ』において、「丈六光銘」は蘇我氏の功績を改ざんした可能性もあるという注釈をつけています。こ

ちらの想定では鴻臚寺掌客裴世清が近畿に来たという古田氏自身の見解との矛盾は発生しません。

私は、日本書紀のみならず扶桑略記にも法興寺は蘇我馬子が作った蘇我氏の氏寺であると記載されていることから、「丈六光銘」に記載されたとおり、鴻臚寺掌客裴世清が訪問したのは大和飛鳥の法興寺（飛鳥寺）であると考えます。

さて、隋書の裴世清派遣記事と日本書紀・推古紀の裴世清来朝記事とが一致するかどうかについて考察する場合、私は「近畿王朝」を「蘇我馬子が推古の上に君臨して霸王としてふるまっていた近畿王朝」として考えます。このような見方をすることによって、「隋書に記載された開皇二十年（六〇〇年）の倭王阿每多利思北弧の遣使記事が推古紀にはない」という問題を、日本書紀が蘇我馬子を推古女帝の臣下として記したために阿每多利思北弧の遣使記事を無視せざるを得なかったとして説明することが出来ます。

推古紀の編者は隋書を参考にしたかどうかという視点で考察してみます。日本書紀全体で見れば、雄略紀と清寧紀に隋書の記事の文章が借用されていることが判明しています。（*小島憲之著『上代日本文学と中国文学』参照）但し、推古紀の編者が隋書を参考にしたかどうかについては明確ではありません。ここでは、推古紀の編者が隋書を読んで参考にした場合と隋書を参考にしなかった場合につ

いて、それぞれ①推古紀の編者は近畿王朝に残る史料を基に裴世清来朝記事を作成した②推古紀の編者は九州王朝に残る史料を基に裴世清来朝記事を作成した③推古紀の編者は全くの創作によって裴世清来朝記事を作成した、という3つのケースに分け、可能性の低い順から考察しました。

（ケース1）推古紀の編者は隋書を読んでもおらず、創作によって裴世清の来朝記事を創作した。

推古紀の裴世清来朝記事は隋書の倭国遣使記事があつてこそ創作の動機になりうるであつて、このケースは考えられません。

（ケース2）推古紀の編者は隋書を読んでもおらず、九州王朝に残る史料を基に裴世清来朝記事を作成した。

この場合、九州王朝の史料に裴世清が鴻臚寺掌客であつたという記事が記されていたこととなります。そうであれば、九州王朝は鴻臚寺掌客裴世清とどこかで会っていたこととなります。九州王朝の史料には鴻臚寺掌客裴世清とあつた時期と場所は記されていないのでしようか。また、文林郎裴清が九州王朝に来たことは九州王朝史料には記されていないのでしようか。どちらの記事も九州王朝史料に残っていたとすると、推古紀編者は当然文林郎裴世清が九州王朝に来た記事を近畿に来た記事として借用するはずで、このケースでは、九州王朝史

料に文林郎裴清が来朝した記事が残つておらず、鴻臚寺掌客裴世清と接触した記事のみが残っていたこととなりますが、それは裴世清が来朝時鴻臚寺掌客という官名を使用していたという仮説以外では説明困難です。

（ケース3）推古紀の編者は隋書を読んでもおらず、近畿王朝に残る史料を基に裴世清来朝記事を作成した。

「大唐使人・鴻臚寺掌客裴世清」という名称を根拠に近畿王朝が対応した相手は唐朝であつて、隋朝ではなかった、という説は、このようなケースを想定している可能性もあります。しかし、推古紀に記載されている裴世清来朝の時期は中国の年代に照らせば隋代であり、隋書の記事に対応しています。日本書紀・推古紀の編者は隋書を読んでいないという前提に立てば、推古紀は偶然に「十年〜十二年の実年代のずれ」を生じ隋書の裴世清遣使記事と一致したとする解釈になりますが、そのような都合の良い偶然が生じるとは考えられません。

（ケース4）推古紀の編者が隋書を読んでも参考にしており、創作によって裴世清の来朝記事を創作した。

この場合、創作の動機は隋書の記事であるから、隋書に記載された文林郎裴世清の名を「大唐使人・鴻臚寺掌客裴世清」に書き換える理由が見つかりません。従つてこのようなケースはありえません。（ケース5）推古紀の編者が隋書を読ん

で参考にしており、九州王朝に残る史料を基に裴世清来朝記事を作成した。

隋代に文林郎裴清が九州王朝を訪問し、唐代に鴻臚寺掌客裴世清が九州王朝を訪問した場合では、推古紀の編者は唐代の鴻臚寺掌客裴世清訪問記事を近畿王朝にきた記事として借用し、なおかつそれを隋代の遣使記事と置き換えたことになり、このような複雑怪奇な手法をとった理由は見つかりません。一方、裴世清が来朝時鴻臚寺掌客という官名を使用していたという仮説では一応の説明はつきまします。問題は隋代の裴世清が九州王朝を訪れたのか近畿王朝を訪れたのかということになります。

(ケース6) 推古紀の編者が隋書を読んだ参考にしており、近畿王朝に残る史料を基に裴世清来朝記事を作成した。

この場合推古紀の編者は、隋代の文林郎裴清の遣使記事を知りながら、あえて近畿王朝に実際に残る唐代に近畿に来朝した鴻臚寺掌客裴世清の記録を隋代の来朝記事に置き換えたことになります。「大唐使人・鴻臚寺掌客裴世清」という名称を根拠に近畿王朝が対応した相手は唐朝であつて隋朝ではかつた、という説は、このようなケースを想定しているように思えます。しかし、せっかく唐代の記録を隋代の記事として載せておきながら、わざわざ「大唐使人・鴻臚寺掌客裴世清」という名称をそのまま残したのか、私は理解に苦しみます。隋代に来朝した裴世

清が鴻臚寺掌客という官名を使用していたという仮説では一応の説明はつきまします。その場合、「大唐使人」という名称は、

推古紀の編者が日本書紀編纂時の中国支配王朝である唐に敬意を表して「大唐使人」という表現に置き換えたという解釈になります。

俳句

影山 武司

さ緑のうねる八十八夜かな
空色のインクに変へて夏近し
トーストに歯形の丸く夏立てり
家ぢゆうを風に放ちて五月かな
じやんけんに負けて半べそ柏餅
万緑を真一文字に大吊橋
緑さす川面に魚の銀の腹
薔薇の香の行間に満ち処女詩集
天井に届くガラスの窓涼し
みづうみの空を縦横夏つばめ

編集後記

SK生

▲いよいよ梅雨がやってきた。毎年のことながら気の重くなる季節である。おまけにここ数年は線状降水帯も発生してとんでもない大雨となることが多い。「われら棲む水の惑星梅雨来たる」とのんびりかまえてもいらぬ。▲梅雨が近いからというわけでもないだろうが、最近、家の近所でカラスがうるさい。それも「カー、カー」というやさしい鳴き声ではない。「ガーガー」と威圧するように繰り返し鳴いたり、「カッカカッ」と短い間隔で鋭く鳴いたりしている。専門家の話ではカラスは3〜4月に3〜4個の卵を産み、生まれたヒナは6月に巣立つという。ゆえに6月はヒナを守ろうとする。親鳥の警戒心が最も強くなる時期となる。あのカラスの威嚇的な鳴き声は必死になつてヒナを守ろうとする親鳥の声だったのだ。▲カラスの鳴き声で記憶に残るのはエドガー・アラン・ポーの詩「大鴉（お

淡々と繰り返す「Nevermore」という言葉に押しつぶされ、ついには発狂してしまふ、というのがその大要である。▲「Nevermore 青春」と言われても古稀をとうに超えた小生には心に響くことはなく発狂することもないが、「Nevermore 物価安定」となると、これは困る。「Nevermore 平和で幸せな日々」も困る。「Nevermore 人権擁護」もだ。数え上げていけばキリがない。それだけ我々の毎日の生活や社会のシステムが危うい状態なのだ。▲そんなことをつらつら考えていて気づいてみれば庭の紫陽花が満開となっている。「たのしみは朝おきいでて昨日までなかりし花の咲けるを見る時」という幕末の歌人の和歌もある。とても手に負えない難しい問題を考える一方で小さなことにも楽しみを見つけたい。



今回は、川柳をよく詠む人は、また川柳をどのようによく読んでいるかを紹介したい。

「綺羅星」の評者も、課題吟「その時」の選者も、九州から全国にまたがって現在活躍中の川柳家である。

綺羅星 千代子

老いふたり生活音はただ静か 遊楽

朝ごはんから始まり、一日が無事に終わった幸せが、「生活音はただ静か」この表現で充分伝わって来る。近詠は、一句一句が成立しなければなりません。一日の流れは二人で永年積み重ねた空気分。読み手も共有できる六句だった。(注：綺羅星は六句投句で、この作者は六句とも入選、巻頭を飾った。以下の句は、入選句から選んだキラリ一句)

幼なじみ男と女にはなれず 幸子

着想に同感。心の中に忘れていようでも、古里の景色と幼友達の屈託のない会話をふと思い出す。

男と女には言葉に表現出来ない部分があるが地球は男と女で回っている。ややこしい男女ではない幼友達の、マーちゃんはあの時のあのままなのだ。

湯に浸り今日のひと日を添削す 千六

やっぱり川柳人は添削。常に添削。一日のべのお風呂は個に返る大切な時間。温いお湯が何もかも流してくれる。

川柳も添削。人生も添削。

眠られず午前三時の爛冷まし 邦弘

三六五日眠られない夜がどれだけあることか。良くても悪くても眠られない夜は生きている限りある。

酒家にとつて夜中の爛冷ましは格別。

静まり返った空気の中でゴクリと三回程すれば大方の辻褄が合うんです。

ぼんやりと過ごす茶の間は我がお城

いぶき

何年、何十年掛かったでしょうか。自分がぼんやり出来る場所が。ワタクシを解き放す大切な時間。自分で造り上げたお城。

生きるっていいもんです。

課題吟「その時」

流青

特選

七日目の朝とも知らず蝉は鳴き 豊柳

〈恋しいいと泣く蝉よりも鳴かぬ虫が身を焦がす〉というが七年土中七日地上の限られた蝉の命。

蝉もまた鳴いて身を焦がす。子孫という次の命を繋ぐための求愛活動はひたすら鳴くことだけ。

身を震わせて伴侶を見つけたことができないければ生まれてきた意味さえ無くなってしまう。

明日はもうその八日目の蝉であることをあの鳴き声は知っているのだろうか。昨日、今日そして明日をぶらりと生きて、命のやりとりの戦争を続ける人間どもに、蝉のこの必死さは恐らく分かるまい。

軸吟(選者がその課題で詠んだ自句)

食うためにカラスにこころ売り渡す

流青

この時、私が詠んだ三句は次のとおりで、いずれも入選であった。

多喜二の死困んだ人も命懸け

くり返す時を逃さぬ鬼あざみ

人間の芯が問われる時が来る



京都府立植物園花菖蒲苑
賀茂川河畔の初夏

